私事雑記帳《1》

なに言ってんのドク。最高のものはみんな中国製だよ

渡邊　憲　横浜市立みなと赤十字病院（横浜市中区）

2018年、GAFA（ガーファ）という言葉はユーキャン新語・流行語大賞にノミネートされ、テック業界以外でも普通に使われるようになった。巨大なテクノロジー企業、Google・Apple・Facebook・Amazonの４社を指すわけであるが、スマートフォン無しでは生活に支障が出るほどに発達したネットワーク社会において、これらにお世話にならない日はない。その一角を占めるAppleが、初めての商品であるパーソナルコンピュータApple Ⅰを発売したのは1976年のことである。Appleの共同創業者であるSteve Jobsは、フォルクスワーゲンバスを1,500ドルで、Steve Wozniakは関数電卓を250ドルで売り払ってApple Ⅰの製造資金に充てたという『神話』は、コンピュータに少し詳しい人の間では良く知られている。

２人のSteveのように、銀行から融資を引き出すほど信用はないが、何か新しい事業を興すアイディアと実行力があるのならば、今日ではクラウドファンディングを利用して資金を調達することができる。クラウドファンディングとはインターネット経由で広く一般に少額の出資を募ることであり、出資者はその額に応じて様々な報酬を得ることが出来る。ゲームやアプリなどのコンテンツ事業であれば完成時にそれを無料でダウンロードすることが出来る。ガジェットと呼ばれる情報端末や携帯ゲームなどの小型の電子機器は製品自体が格安で手に入る。映画や展示会のような文化活動の場合は、報酬としてその入場券が得られたり、作品にクレジットが入れられたり、かなり高額な場合には作者や出演者とのお食事券などというものまである。また、『気持ち』程度の提供に対しては『感謝』のみが贈られることもある。

最終的に期待通りの報酬が得られるかは全くわからない。クラウドファンディングは投資なのだ。計画通りの期日に製品が届くこともあれば、１年くらい音沙汰がなかったのに忘れた頃に立派な品物が送られてくることもある。もちろん、ひどい場合はプロジェクト自体がキャンセルされ、ホームページもメールアドレスも無効になってしまうことさえある。その逆に、事業の規模が大きくなりすぎる場合もある。VRゴーグル（仮想現実空間を覗くメガネです）であるOculus Riftの試作品はたった100ドルで手に入れることが出来たが、今や業界標準の地位を得てAmazonから350ドルで簡単に購入することが出来るようになった。会社自体もFacebook社に20億ドルで買収されてしまったのだ。ドイツのPanono社のVR

怪しい包み

粗雑な梱包

報酬の一例

カメラ（360°のパノラマ写真を撮影するカメラです）はコンシューマー向けの数万円の製品を開発していたが、出荷されたのは30万円以上もするプロ仕様の1.08億画素のカメラだ（最新iPhoneの10倍）。このときはモノはいつまでも届かず、かわりに送られてきたのはドイツの裁判所からの権利放棄についての同意書面だった。

今までに実際に得られた報酬はどうであろう。私の場合は、パノラマ写真や3D動画・超小型の天体観測用などの特殊用途向けのカメラ、コンピュータの周辺機器が多い。大抵はDHLやFedExといった国際宅配業者から無造作にビニールシートで覆われたいかにも怪しそうな包みとして送られてくる。発送元は中国のどこかの空港であることがほとんどだ。しかし、中から出てくるのは、そこそこ素敵なデザインのパッケージで、開封の儀のわくわく感が駆り立てられる。中身はというと、スタートアップ企業のデビュー作としては十分立派なものではなかろうか。3Dプリンターを利用した設計技術の進歩や世界の工場たる中国の製造精度の向上の賜物である。何せこういった企業の開発チームは出身国さえ様々であるが、MITやスタンフォードのような有名大学卒の秀才ぞろいだったりするのだ。

決してムダな投資をしているわけではない。世界中のさまざまなアイディアが芽を出して成長していく様を、ほんの少しお水を撒きながら観察しているのだ。将来、それが巨木になったとき、私のおかげであると自己満足に浸りたいのだ。もし、いくらかの興味が湧いたなら、KICKSTARTERやIndiegogoといったサイトを覗いてみて欲しい。本邦では、どちらかというと文化事業や社会活動の資金調達に強いCAMPFIREのようなところがある。それなりの元手があれば、セレブとディナーの食卓を囲むことができるかも知れない。

私事雑記帳《2》

ざふのき

入交　純也　湘南鎌倉総合病院（鎌倉市）

●合唱

父親が学生の頃、高知から上京してきて、私自身は新宿区で生まれ育ち、大学は東京を離れ福島県立医科大学に進学しました。大学生時代6年間過ごした福島県は合唱が盛んで、私も大学の男声合唱団とF.M.C.混声合唱団という市民の合唱団に在籍、パレストリーナの宗教曲などを歌っていました。合唱を始めたのは高校3年生の時、同級生に音楽部に誘われたのがきっかけでした。その音楽部の「中興の祖」で、私が現役の時も時々練習に来ていた当時大学生の先輩は、県立福島高校からの転校生で、練習の時の体操や発声などF.M.C.の指揮者の指導に基づいていました。その先輩の福島高校での同級生が、大学男声合唱団の先輩でした。

その後、今から20年ほど前にF.M.C.の50周年記念演奏会があり、その頃私もちょっと混ぜて貰っていました。大学生時代に教わった指揮者はもう故人で娘が継いでいましたが、故指揮者の師匠は健在で、その指導する合唱団を東京から引き連れて、ジョイントコンサートが開かれました。記念演奏会の後、

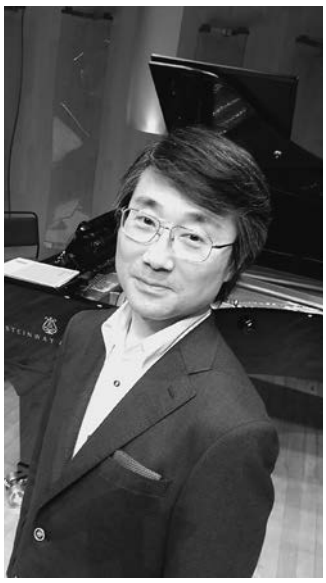
東京の合唱団の演奏会で同じ曲を歌うから手伝えと云われて、F.M.C.の数名とともに賛助し、私はそのままいついてしまって現在に至ります。ここは現代曲が多く、時に委嘱新作も歌い、難しいのです。写真は、ここの演奏会終演後にピアノの横で撮って貰ったものです。

大学生時代は高校での練習の基本となった指揮者に習い、現在は大学生時代の指揮者が教わった師匠の指導を受けていることになります。

声の質はハイバリトン、要するに高い声も低い声も出ない普通の人です。高校ではテノール下、大学１年生では経験者は外声と云われトップテノール、２年生になったら卒業生が複数抜けたのでセカンドテノール、F.M.C.もテノール下でしたが、勉強で混ぜて貰ったアンサンブルでは先輩に勧められてバリトンで、現在もバリトン主体です。河原先生に誘って戴いた神皮混声合唱団では、人数の関係や学生時代にハレルヤのテノールを歌ったことからテノールでしたが、やはり高い所はつらいです。

●歌舞伎

もともと父親が落語が好きで、前の圓歌、前の金馬のカセットテープや、角川文庫や講談社文庫の落語全集を買って貰ったり、末廣亭や紀伊國屋ホールの紀伊國屋寄席へ連れて行って貰ったりしていました。そのうちに芝居噺に興味を持ったら、母親が芝居が好きだったので、家族で歌舞伎を見に行く様になり、初めて見に行ったのは昭和55年３月、当時の若手花形の「通し狂言 仮名手本忠臣蔵」でした。富十郎、吉右衛門、海老蔵（十二代目團十郎）、宗十郎、澤村藤十郎、梅枝（現時蔵）など。主な役者の中で最年長は富十郎、私は中学生でしたが、既に当時の富十郎の年齢を越えてしまいました。早野勘平、塩冶判官などいくつかの役はダブルキャスト、七段目は孝夫（現仁左衛門）の平右衛門、玉三郎のお軽、染五郎（現白鸚）の由良之助で見て、何年か前にこの３人で演じた際にも見に行きました。



翌月は五代目歌右衛門五十年祭、幸二改め橋之助襲名があり、現在の芝翫で私と同い年です。

当時の役者で、八代目幸四郎（初代白鸚）は病気がちだったのであまり見られませんでした。鈴ヶ森の幡随院長兵衛、襲名時の井伊大老と七段目由良之助（力弥は金太郎改め染五郎、現幸四郎）を見ましたが、昭和56年１月の「梶原平三誉石切」は受験勉強中だったのでNHKの初芝居生中継（この頃から始まった様です）で見て、白鸚襲名後の「碁太平記白石噺」、大黒屋惣六は病気休演で先々代仁左衛門が代役でした。新聞などではBehçet病で亡くなったとされていますが、実際には乳房外Paget病だったらしく、発症部位の性質上、受診が遅れた様です。

福島医大在学中は、帰京した時に見に行くくらい、また私を合唱に誘った高校の同級生が京都に行っていたので、切符を取っておいて貰って、前回改修前の南座顔見世に２回行き、先々代仁左衛門の七段目、寺子屋などを見ました。東京で就職後はたまに見に行く程度、歌舞伎座さよなら公演の後半から再開、閉場後は少し減りましたが、再開場後は殆ど３階へ毎月の様に通っています。新しい歌舞伎座は、劇場本体の外観や舞台、客席は以前と殆ど一緒、そこへエレベーターやエスカレーターを作って、客席外が狭くなった印象です。よく行っていた蕎麦食堂、おでん食堂、カレーコーナーはなくなってしまい、劇場ではおにぎりなどを軽く食べ、終演後に外で食べています。歌舞伎座裏の方のバーには時々芝居の関係者が見えるそうで、竹本の太夫さんが来ていました。